

博士論文の要約

氏名 呂 怡屏

論文題目 台湾の先住民族認定とエスニシティの形成に関する文化人類学的研究
——シラヤ族の「正名運動」を事例として

本論文の目的は、台湾の先住民族であるシラヤ族が、台湾の中央政府に対して先住権を求めてきた「正名運動」の分析を通して、シラヤ族のエスニシティが形成される過程を明らかにすることである。「正名運動」とは、台湾原住民族の人びとが先住民族としての公的な承認と先住権を獲得するために政府に対して行ってきた社会運動である。1980年代以降、民主化を背景にして様々な民族アイデンティティが台湾社会の中で顕在化してきた。一方で、シラヤ族を含めた平埔族は漢化が進み、先住民族集団としての公的認定を受けられない現実がある。

従来、平埔族の「正名運動」を対象とした研究では、法制度を改正する要求と伝統文化を復興する営みが扱われてきた。これらの研究では、法制度の批判的検討と文化復興の事例紹介にとどまり、「正名運動」が必ずしも体系的には扱われてこなかった。

本論文は平埔族のなかで「正名運動」を積極的に進めているシラヤ族を対象とし、先住民族の身分を回復するための政治的な交渉の過程と、民族認定の条件を満たすためにおこなわれた文化復興の実践を民族誌として記述し、集団内部、民族集団間、政府との関わりのなかで、シラヤ族のエスニシティが形成されていく過程を分析した。その上で、シラヤ族が台湾社会の中に自らを改めて位置づけていく営みを歴史的、社会的、文化的文脈から明らかにした。研究方法については、参与観察と聞き取り調査の方法を用いて、シラヤ族の「正名」の政策決定の過程、阿立祖信仰の日常的な実践、年中行事の夜祭、および文化復興事業に関する調査をおこなった。

本論文は序論から結論までの10章の構成で、その内容は以下の通りである。

第1章の序論では、研究の目的、台湾の民主化と原住民族運動との関わり方を概観した。その上で、国民国家における民族集団の生成や認定にあたって集団と集団の相互関係、民族集団と国民国家の関係、および先住民と国民国家の関わりという3つの観点をもとにして、エスニシティ研究と台湾社会の研究における本論文の意義を示した。

第2章では、17世紀以降オランダと清朝統治下の歴史記録をもとにして平埔族に付与されたイメージを整理するとともに、歴史研究や人類学研究を概観して、平埔族が歴代統治者の各々の目的により統治体制に組み込まれて民族集団として区別し、外部から「熟番・平埔族」のエスニシティを付与することを示した。一方、1980年代以降、研究者が漢族中心の研究視点から脱却し、平埔族の歴史や文化を再び掘り起こすことは、平埔族の有識者に刺激を与えて、文化伝承と正名運動を展開させることにつながったことを確認した。

第3章では、1980年代以降の「正名運動」における、シラヤ族と地方政府及び、中央政府との関わり方を比較した。地方政府が1990年代末から地域の歴史を尊重し、シラヤ族のエスニシティの顕在化に働きかけ、「正名運動」に協力的であったのに対し、中央政府

は 2010 年以降に多文化主義の考え方をもとにして「正名運動」に対応していった時間的なずれがあることを明らかにした。シラヤ族内部の実践では、2 人の主導者は政治の場で平埔族のエスニシティを構築する方法に異なる考え方がある。主導者が政府との交渉を重視する、または原住民族との交流と理解を重視することによって、それぞれ平埔族の正名運動に関する行動を起こしてきたことを明らかにした。

第 4 章では、シラヤ族が継承してきた「阿立祖信仰」について、本論文の調査地である吉貝要集落の住民の日常生活における礼拝、信仰に関する口頭伝承について具体的な事例を記述した。「阿立祖信仰」には漢族の民間信仰の要素が組み込まれている一方で、「阿立祖信仰」の核心におけるシラヤ族の信仰の内容と礼拝の作法を維持すること、および職能者の行動に据える原住民族のシャーマニズムの特徴から、伝統信仰によって形成されたシラヤ族のエスニシティの重層性を明らかにした。

第 5 章では、吉貝要集落でおこなわれているシラヤ族の年中行事である「夜祭」についての民族誌的調査の結果をもとにして、国の無形民俗文化財の指定が「夜祭」に与える影響、「夜祭」に関わる様々な立場の人たちの考え方とその変化を示した。「夜祭」とその準備の過程はシラヤ族文化に関わる機会を集落の住民に増やすことになり、住民の伝統文化への再認識または帰属意識を強めるとともに、外部者にシラヤ族の先住民族としてのエスニシティを意識させていたことを指摘した。

第 6 章では、17 世紀に編纂されたシラヤ語による聖書、17 世紀から 19 世紀にかけて作成されたシラヤ語と漢語が併記された土地売買契約書、1920 年代の言語学調査の資料に基づいて、他の原住民族諸語やフィリピン諸語といったオーストロネシア語族との関係から、シラヤ語の音韻・語彙・文法体系が復元されていったことを記述した。その過程には、オーストロネシア語の祖語との関係にもとづく歴史的な捉え方と、現在使われている他のオーストロネシア語と対照させる共時的な捉え方が含まれることを明らかにした。シラヤ語教育を実行する人たちの立場によって、文献資料の解析やコメントがそれぞれ違うことが明らかにされた。

第 7 章では、吉貝要集落とシラヤ族の支族とされてきたタイヴォアン族の小林集落での伝統文化の再興に焦点を当てた。両方の集落で共通していたのは、博物館に収蔵されてきた衣服の資料、古写真も含めた歴史資料が研究者との協働のなかで活用され、刺繍工芸を中心とする伝統工芸の復興が進められた点であった。さらに、2009 年に発生した「八八水害」で被災した小林集落の住民は、先述した物質文化の再生と自分たちの文化を展示する博物館の建設を通して、シラヤ族としてではなく、タイヴォアン族としてのエスニシティ形成を進めていることを明らかにした。

第 8 章では、日本の町づくりに当たる「社区総体营造」に焦点を当て、吉貝要集落の人々が自らの歴史と文化を解釈して景観を創造する過程を記述した。これらの景観は集落の住民や外部からの訪問者に、シラヤ族のエスニシティを可視化させ、その歴史と文化を理解させる役割を果たしていることを明らかにした。

以上の各章で明らかにしたことにもとづき、第 9 章では現代のシラヤ族のエスニシティの形成について考察し、以下の 3 つの結論を得た。

1) 歴史的に異なる統治者の政策により、集団間関係に変化が生じ、現在の台湾原住民族と平埔族といった民族集団が差異化された。清朝統治時代には、統治者と近い距離にあ

る非漢族の台湾住民が熟番と分類された。日本統治時代には近代国家を構築するため、熟番と生番の自律的社会は解体させられ、のちに平埔族と高砂族に改称され、地方行政に組み込まれていった。1950年代以降、中華民国政府は国民国家の形成にあたり、かつての高砂族は同化政策の対象となる民族集団として標識したが、平埔族はすでに漢族の歴史と社会に組み込まれた存在とした。このように、平埔族のエスニシティには時代による変化が見られ、それは施政者によって強い影響を受けていたことが明らかになった。

2) 施政者や多数派の漢族側が一方的に与えてきた先住民族のエスニシティは、1980年代以降、中華民国政府が多民族で構成する台湾社会のあり方を承認することで変化していった。この時期に展開した原住民族運動に影響を受け、シラヤ族が開始した「正名運動」は、その初期には地方政府と連携すると同時に、中央政府と対峙するという特徴が見られた。シラヤ族は地方政府と中央政府との政治的交渉を進め、既存の先住民族の認定制度を根本から変えるのではなく、新たな民族カテゴリーを設けることで、台湾社会の中における自分たちの位置づけを確固たるものとしていった。

3) 先住民族の身分認定を要求する運動と並行して、シラヤ族の人たちは他の民族集団、政府、研究者等と関わりをもちながら、民族認定の基準を満たすための文化復興に取り組んでいった。特に、伝統的な信仰として継承されてきた「阿立祖信仰」を核とし、その年中行事をより活性化させたり、博物館に収蔵されてきた祖先の資料を手がかりとした文化復興を通して、シラヤ族の人たちは、自民族への帰属意識を強めるとともに、自らの歴史を掘り下げ解釈する態度を涵養していった。

シラヤ族のエスニシティの構築のメカニズムは、国家の制度から大きく逸脱することを避けながら、独自の文化と民族固有の歴史の確立を目指したものであり、そこには台湾社会への協調と自分たちの主張の両方が存在していたことが理解できる。

現代の台湾において構築されているエスニシティは、歴史的な多層性を背景にしながらも、民族集団、中央政府と地方政府、一般台湾社会、民族集団を研究する研究者との関係のなかで、集団間の境界線が引き直され続ける多相的なものである。